

る。バビロニア・タルムード時代編纂時には、特に平行記事もなかった伝承が、後年重要性を増していった構図が推察される。他方、民数記ラツバ二〇・一他では祭司の代わりに賢者を位置づける傾向がある。

四 結論・計量的な予備考察であり、今後、膨大な用例を当てる必要があるが、ラビ文献とされるジャンル全体では、近代ユダヤ学が想定するほど、預言者・預言が重大な位置を占めているわけではない。他方、祭司を賢者に置換するレトリックも働いているようだ。

芸術とスピリチュアリティ

——美大生への質問紙調査から——

久保田 力

今日の日本の宗教意識の現状は、一九九〇年代までのように、特定の宗教教団に属して活動を行うのではなく、個人がそれぞれの生活の場に根ざした、芸術創作や癒しや救いのための自助集団活動などによって、いわば草の根的なものへと変容してきており、それにつれていわゆるスピリチュアルなもの、「精神世界」なるものへの関心も深まってきている。

本稿では、そのようなスピリチュアリティへの関心の深まりと、芸術・デザインの創作の志向性がいかに関係しているのか否かという問題意識に基づいて、筆者の奉職する芸術大学（東北芸術工科大学）において、約七六〇名の学生（全学生数の約

四割）を対象にした質問紙調査を二〇一一年一月に実施した。その集計結果と分析の一部の報告を行いたい。

この調査は、二〇一〇年一月に続いて二回目になる。一回目の予備調査時の質問紙は四十一問であったが（約二二〇名対象。その結果については『論集（印度学宗教学会）』三七号、二〇一〇参照）、今年二〇一一年一月の本調査の質問項目は約半数近くを改変し、全四十六問にした。一般的なスピリチュアルに関する問いとともに、ここで特に重視したことは、現代の靈魂観（問1）と、また、生・死・死後について抱くそれぞれの色のイメージ（問2・4）である。全体の集計結果とその分析については別途報告を予定している（『東北芸術工科大学紀要』一八・一九合併号、二〇一一）。ここでは、結果と分析の一端を報告するに留める。

問1において、「魂（靈魂）」を別の言葉で言い換えるとするればどれが最も近いと思いますか。あてはまるものに一つだけ〇をつけてください。1感情、2命（生命）、3心（意識）、4精神、5人格、6力、7価値、8知性、9理性、10その他（自由記述）を問うた。その結果は、まず男女ともに「4精神」が最も多く（約三四%）、二位は「3心（意識）」（二七%）、三位が「2命（生命）」であった。これと全く同様の傾向が二つの学部別比率結果（芸術学部とデザイン工学部）でも見られた。このことから、現代的靈性のキーワードとして、精神、心（意識）、命（生命）の三つが挙げられる。思想史的に考察するならば、これらの三つの概念は、「精神・心」と、「命」という大きく二つのカテゴリーに分けられる。というのは、前二者は、

思考や認識などの「こころ」に関係した心理的概念であり、一方、命や生命は「息（氣息・生氣）」に由来する呼吸概念だと考えられるからである。もう一つの靈魂觀念の起源である「自我」觀念は日本語には希薄であると思われる。しかし、先の二つの靈魂觀念の古来よりの伝統は今でも確かに息づいているということが出来る。

問2～4で問うた生の色、死の色、死後の色のイメージについてであるが、生の色は赤が最多（一八％）で、以下に白（無色・透明含む）、青、黄、灰、オレンジ、緑、黒、ピンク、茶、紫と、少しずつ％を減らしながらつづくのが特徴であった。有彩色が計三割いる一方で、白（一五％）と、また、灰と黒を合わせた数（一五％）である無彩色の合計も計三割になる。これは暗い生だけでなく、同時にこの生の黒は神聖、莊嚴、繊細、洗練されたスタイリッシュな肯定的パワーを表すのではなからうか。灰は恐らく迷いや疑いなど自信のなさや不安定感・不完全感を表しているように思われる。なお、これらの色を回答した理由も自由記述してもらったので、それらの質的調査は別途行いたい。死と死後の色は黒と白が多い（死は黒、死後は白が多）が、死後は死よりも全体として明るいイメージであるのは特徴的であった（全回答の明／暗と派手／地味の四局面における分布をダイヤグラムで表示）。オレンジが死の色の回答には欠如することから、それは逆に生を証明する色と位置づけられる。また、数％の少数ながら、どの問にも必ず「紫」を回答する者が存在する。紫は古来特殊な色であるから、靈性を特徴づける色であると言うこともできよう。

「迷宮」図像群とスピリチュアルケア

中 島 和 歌 子

迷宮 (labyrinth) 図像は、古代地中海世界を起源とするきわめて古い歴史を有するかたちであり、一九九〇年代以降は特にアメリカを中心として、スピリチュアリティの文脈における瞑想や祈り、ヒーリングのツールとして普及が進んでいる。世界各国の迷宮を登録・検索できるウェブサイト、ワールドワイド・ラビリンス・ロケーターによれば、二〇一一年八月末の時点での総登録件数は約三八〇〇件（うちアメリカ約三〇〇〇件）である。設置場所による絞り込み検索を行うと、「教会もしくは礼拝所」が約千五〇〇件、「公共の場」が約五〇〇件などといった結果を確認することができる。現代のスピリチュアルケアを考察する一助として、右記サイトの「病院、ホスピス、ヘルスケア」カテゴリに属する約一四〇件の事例がひとつの手がかりとなる。

医療施設等に設置されている、所謂ホスピタル・ラビリンスと呼ばれるこれらの設備は、グリーフケアのため、あるいはカタルシスの場、セルフケアのツールとして、施設内の庭等に作られている。迷宮が、その通路を患者あるいはその家族が歩くことによって様々なスピリチュアル・ペインを軽減する効果を期待されて作られ、利用されている状況については、ジェフ・セイワドの報告などにも詳しい。こうした事例においては、迷宮図像はホリスティック・ヒーリングの一環として位置づけら